

宗教というものを実践するにしても、あるいは研究の対象にするにしても、その宗教が持つ聖典や啓典がどのような意義や役割を持っているかを考えることは有益だ。イスラーム研究の第一人者である井筒俊彦（1914～1993）は、イスラームという宗教的・文化的な運動を概して、聖典「コーラン」の自己展開と称した。つまり、今日我々の目にうつる宗教・文化としてのイスラーム的なもの—他にはないイスラームに特徴的なもの—の全ては究極的には「コーラン」というただ一冊の書物に集約されており、こういった視点に立つと一人の人がムスリムになるということは「コーラン」を“根”とし、自らをその解釈的な発展上にある“幹”あるいは“枝葉”として捉えることと言える。

それでは、天理教の場合はどうであろうか。教祖中山みき直筆の「おふでさき」（全十七号）は、「みかぐらうた」「おさしづ」と並んで天理教三原典の一つとされ、教義の根底をなす書物である。しかし、井筒が評するイスラームとの比較で言えば、天理教はかならずしも「おふでさき」の自己展開とはいえない。なぜなら、天理教では書物として記された「おふでさき」だけでなく、中山みきが身近な人に伝えられた話や身に行ったことが人の生き方の手本として重視され、イスラームでは預言者マホメットの言行録である「ハディース」が「コーラン」を二義的に補完することに比べると、中山みきの言行録としての『稿本天理教教祖伝』（以下、『教祖伝』）や『稿本天理教教祖伝逸話篇』（以下、『逸話篇』）が「おふでさき」より二義的であるとは（編纂史的には別にして）教義学的には必ずしもいえないからだ。つまり、天理教の全てが集約される一点があるとすれば、それは「おふでさき」という書物ではなく、中山みきその人といえる。

例えば、天理市の天理教教会本部を囲むようにして建築されている「おやさとやかた」について考えてみよう。「おやさとやかた」は天理大学、天理小学校、天理よろづ相談所病院「憩の家」などの施設として利用されており、天理教の信仰者以外の人にとっても天理教文化の一つとして特徴的な建物だ。ところが、その構想の基は「おふでさき」ではなく、「今に、ここら辺り一面に、家が建て詰むのやで」（『逸話篇』158～159頁）云々という中山みきの言葉にある。一人の女性の一言に基づいて壮大な建築が進められているということは、天理教の所作一つひとつが中山みきという人から生まれていることを如実に表している。

しかし、このように言ったとしても、天理教にとって「おふでさき」という書物が重要であることに変わりはない。つまり、天理教を中山みきという一点からの展開と捉えたとしても、中山みきの直筆である「おふでさき」の重要性が今日においてもこれから先においても増すことはあっても減ることはなく、むしろ中山みきに迫る一番確かな手がかりといえる。天理教を信仰する上で、あるいは天理教を研究対象として理解する上で「おふでさき」は決して外すことのできない礎石の一つであり、中山みきに準ずる「おふでさき」の展開としての天理教という視座も持ちえるのではなからうか。

さて、井筒は「コーラン」という聖典を学問的な態度で追及した。彼は、イスラームというものを信仰体系としての「宗教」だけでなく、世界情勢に影響を持つ「政治勢力」や「経済勢力」、

あるいはその伝統のなかで蓄積された技術や知識などが多層的に重なった文化総体として捉え、その有機的なダイナミズムを描こうとした。そして、その文化的な有機体のどの側面を取ってみても、それらは究極的には「コーラン」という書物に収斂されるのではないかという見解を抱いたのである。

このように宗教を文化的な有機体として価値中立的に理解しようとした学問的な態度に比べて、この連載ではより信仰者に近い立場から天理教の「おふでさき」を追求したい。つまり、たとえば朝顔の生育を外から眺めるのではなく、直接自分で種をまき、水を与えてその生育に携わるように、「おふでさき」（中山みき）より展開される宗教運動が自己と関係において生起する経験を記したい。井筒は、運動する文化的な有機体を観察する中で「コーラン」を発見した。しかし、我々の目の前にはまだ観察すべき有機体は存在しない。それは「おふでさき」を読む中で生まれてくる私の信仰の様であり、これから育っていくのである。

このように宗教的なテキストに信仰的な立場からコミットする仕方では、しばしばその主観的な見解が読者の理解を得ることを困難にする。つまり、「私」が読む「おふでさき」は結局「私」のものでしかない。しかし、他方で主観／客観の基準は実際には曖昧に揺れ動くものであり、朝顔の生育に愛着をもってコミットする人が、朝顔の生態に関する理解を客観的に得られないかと言えばそうでもない。そこには実際に水をあげてみて得られる洞察があり、それがただ眺めているだけの人にも理解されることもあるだろうし、さらには、「愛着を持って花に名前をつけるとよく育つ」といった新しい発見もあるかもしれない。その意味で、「私」のものとして読んだ「おふでさき」は必ずしも「私」のものとは限らない。

そもそも信仰的／学問的という区別もおおよそ曖昧なもので、信仰的＝主観的・閉鎖的、学問的＝客観的・開放的とは必ずしもいえない。例えば、社会学の界限では、「ウェーバー学」「ウェーバー産業」といった言葉がある。それは、社会学の巨匠マックス・ウェーバーの研究が独自の研究分野として著しく自立化・高度化した結果、ウェーバーの専門的研究が社会学そのものから乖離してしまい、現代社会の実際的な諸問題に対して具体的な処方箋を提示できず、ウェーバー研究者以外の読者の関心を惹くことが困難になっている現状を揶揄する言葉である。そのような事態を外から眺めれば、ウェーバー産業に携わる人はウェーバーの“信者”に見えてくる。

むしろ現代社会は、アカデミズムや宗教界に限らず、価値観や関心をともにする人同士で結成されるサークルが相互不干渉に散在しており、各サークルを横断するような普遍性を持った言説を最上段にかざすことが困難な状況にあると言える。このような社会において一人の若者が宗教書を自己の信仰にもとづいて読むという経験の記録はどのような意味を持ちえるのであろうか。「天理教産業」への寄与に墮するのみか、それとも社会に還元されるべき経験知として保存されるのか。あるいは、人の評価はともかくも神が喜ぶのであろうか。

今号より『グローバル天理』の紙面をお借りして、おふでさきの解釈を通じて生成する私の信仰のかたちを「おふでさきの有機的展開」として記していきたい。